

【研究資料】

小4 社会科における開発単元の事例紹介
～沖縄県うるま市の海中道路を題材にして～

A Case Study of the Social Studies in the Fourth Grade
in an Elementary School

嘉納英明，上運天 大

1. はじめに

小学校4年の社会科には、開発単元^{*1}が設定されている。この単元は、地域の発展に尽くした先人の具体的な事例を調べ、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心について考えさせる内容である。したがって、授業者には、各地域の歴史を掘り起こし、地域の発展に尽くした先人を取り上げ、それを、どのような視点から取り扱うのか、が問われる。沖縄県においては、小学校社会科教育研究会の協力を得て、地元の出版社から「副読本」が出版され、4年生で活用されている（『新版ひらけゆく沖縄県』沖縄時事出版）。この「副読本」で取り上げられている先人（儀間真常，玉城朝薫，屋良朝苗，宮良長包）は、沖縄全域に影響を与えた人物であり、また「副読本」の性格が県版であるため、子どもが調べ学習をする際の情報が、学校図書館等において一定程度蓄積されている。一方、各地域の個別の先人については、市町村教育委員会編集の「副読本」の中で取り上げられているが、市町村の「副読本」以外に子どもがアクセスできる情報が限られている場合もあって、調べ学習等の追求活動がなかなか進まないという課題もある。

本稿で取り上げる開発単元は、うるま市教育委員会編集の「副読本」で取り上げられている志喜屋孝信（沖縄民政府初代知事，琉球大学初代学長）を学習対象にしたのではない。授業者（上運天大／うるま市立彩橋小学校教諭）の主張－「先人」＝「特定の人物」と捉えず、「自分たちのオジー，オバーが頑張ったから自分たちの生活が向上した」ということを考えてもらいたい－に根ざした実践である。上運天教諭は、「そこに地域の先人の海中道路^{*2}への思い（誇りとこれからの未来）を感じさせたい」「なぜ海中道路が必要だったか」「自分たちの生活の中の海中道路」を考えさせることで、開発の光と影の部分についても子どもの思考を深めさせたいとする意図をもって実践に望んでいる。上運天教諭は、地域の開発単元にこだわり、これまでも、第6学年の「暮らしと政治」の領域「人々の願いとまちづくり」の中で、地域の公園が住民の願いと行政の働きにより実現してきたプロセスを明らかにした（全14時間扱い，平成20年2月22日の公開授業，宜野湾市立宜野湾小学校）。本稿で紹介する授業は、第4学年のまちづくりの観点から地域を対象化し、実践を試みたものである。

本稿で紹介する授業は、2012 年（平成 24）11 月 9 日（金）、彩橋小学校で公開されたものである。指導者は、上運天大教諭、4 年 1 組（男子 12 名、女子 10 名、計 22 名）で実施した。なお、上運天は、指導案を含む授業実践の記録を執筆し、嘉納は、同記録の分析と加筆補正、及び「1. はじめに」「3. まとめにかえて—成果と課題—」を担当した。

※1 開発单元 地域の発展に尽くした人物等を取り上げ、この人物が地域の人々の生活向上に対してどのような貢献を果たしたのかを学習するものである。地域には、開発单元になり得る様々な素材があり、それを教材としての価値を見出す授業者の力量が問われる。

※2 海中道路 沖縄県うるま市にある道路。沖縄県道 10 号伊計平良川線の一部であり、勝連半島から平安座島を結ぶ 4.7km の道路である。道路建設の前から、干潮時には徒歩で行き来出来た。1960 年に島民が海中道路建設期成会を結成し、翌年から海中道路の建設が始めるが、台風の影響により建設工事が進まなかった。1970 年、島に石油会社が進出し、海中道路が建設され、1974 年、当時の与那城村に無償で譲渡された。参考：平安座自治会『故きを温ねて』1985 年。

2. 授業実践

1) 单元名 大单元名「7 昔から今へと続くまちづくり」

小单元名「2 まちを開く～海中道路と私たちの暮らし～」

2) 单元目標

地域の発展に尽くした先人の具体的事例を調べ、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えさせる。

3) 单元の評価規準

【社会的事象への関心・意欲・態度】 地域の発展に尽くした先人の働きに関心を持ち、それを意欲的に調べ、地域社会のよりよい発展を考えようとしている。

【社会的な思考・判断・表現】 地域の発展に尽くした先人の働きから学習問題を見いだして追究し、人々の願いや生活の向上に尽くした先人の働きや苦心について考えたことを言語などで適切に表現している。

【観察・資料活用の技能】 地域の発展に尽くした先人の具体的事例を的確に見学、調査したり、年表などの資料を活用したりして、必要な情報を集めて読み取ったりまとめたりしている。

【社会的事象についての知識・理解】 地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を理解している。

4) 小单元について

<児童観>

学級の児童の単元内容に関して実態把握を目的としてアンケートを実施した。その結果、歴史上の人物で知っている者は、あまわり、織田信長、坂本龍馬、志喜屋孝信を挙げた。地域を良くしようとして貢献している人物として公民館の職員を筆頭に挙げている。こうした児童の回答から、自分たちの住むまちの歴史やまちづくりに関わる人物についてふれ、学ぶ機会がほとんどなかったことが伺われる。また社会科の学習について、自ら進んで調べようとする児童は少なく、社会科の学習に対して全体の関心は低い傾向がみられた。授業における話し合い活動については、「楽しい」と「どちらかと言えば楽しい」を合わせると、過半数を占めている。海中道路は、ほぼ毎日利用している児童が多く、生活道路として位置づいている。

<教材観>

本単元は、学習指導要領・2 内容(5)のウにあたり、地域の人々の生活について調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えることがねらいとなっている。その際、具体的事例「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」として「開発」を取り上げるとある。また、第3・4学年での「みつめてみようわたしたちのまち」「安全なくらしとまちづくり」「健康なくらしとまちづくり」とも関連している。

うるま市の副読本や沖縄県版副読本では、志喜屋孝信や儀間真常等、沖縄の歴史を語る上では欠かせない人物が取り上げられている。しかし、児童に先人の働きや苦心を考えさせるには児童自身の生活との関わりが薄い。そこで、3年生の昔の道具調べ等の「もの」を中心とした学習をふまえ、具体的な事例から日常生活と地域の発展につくした先人の働きとのかかわりについて学ぶことができる教材として「海中道路」を選定した。その理由は以下の通りである。

①児童及びその家族がよく利用している。

②海中道路の建設や運営に自治会や地域住民が深くかかわっている。

海中道路は、児童の生活に密着し、地元の地域の特性をよく表しているものであり、児童にとって、より身近な学習課題として受けとめ、追究していくことができる教材である。したがって、ここでの学習は、「先人」＝「特定の人物」と捉えず、「自分たちのオジー、オバーが頑張ったから自分たちの生活が向上した」ということを考えてもらいたい。そこに地域の先人の海中道路への思い（誇りとこれからの未来）を感じさせたい。そして「なぜ海中道路が必要だったか」「自分たちの生活の中の海中道路」を考えさせ、開発の光と影の部分も踏まえ、そこから出てきた子どもの意見を深めていきたいと思う。

<指導観>

実際の授業では、「教材開発の工夫」、「話し合い活動の工夫」を中軸に実践を試みた。

－教材開発の工夫－「はてな？」の続く教材づくり

学習活動を通して、学習する前とは違うものの見方・考え方ができるような教材開発の工夫を行う。また自分たちの生活に欠かすことのできない海中道路を教材化することで学習意欲の向上につながると考える。地域出身の中学校社会科教諭の活用も効果的なものになると考える。

また、先人の働きとしての社会的・歴史的な事象を資料として教材化し、現在の自分の生活と比較して、自分を含めた「人々」と「もの」との関係を考えさせたい。そこで先人の働きを考えさせたい。

－話し合い活動の工夫－「聞く・話す・話し合う」のレベルの設定と児童への手立て

| | レベル1 | レベル2 | レベル3 |
|------|--------------------------|-----------------|-----------------------------|
| 聞く | 相手の言いたいこと（大事なこと）をしっかりと聞く | 話を聞いて、質問や感想が言える | 自分の意見と比べながら聞く（同じところやちがうところ） |
| 話す | 順序よく話す | 理由や例をあげながら話す | 話の工夫を考えながら話す |
| 話し合う | 相手の話を集中して聞く | 司会の進行にそって話し合う | お互いの立場や意図をはっきりさせながら計画的に話し合う |

【レベル1・2の児童に対する手立て】

【聞くことの手立て】

- ⇒・発問の工夫。内容確認（聞き直し、繰り返し読む、単語の確認）
- ・授業中の意思表示（挙手、起立、パートナーでの確認、場所移動）
- ・道徳的観点からの継続指導（聞く・聴くとは？！話している人を無視しない）
- ・指示を聞かないと、次の作業に進めない授業展開をする。

【話すことの手立て】

- ・考える時間の確保。自分の考えを「書く」。ワークシートやノートに自分の考えを書いてから、発表する（書くことで、自分の考えがしっかりと持てる⇒持てるから話す）。
 - ・話型の提示、ワークシートの工夫。
 - ・声かけの仕方（挙手を求める時）⇒「分かった人」と問いかけない。考えることを意識させるうえでも、「考えを持っている人」と問いかけるようにしている。
 - ・考える癖をつけさせるために⇒「考えを持っている人（挙手）」持てなかった子を立たせる。
- ⇒授業中に、常に考えることが大切であることを伝える。

- ・ 根拠になる部分を生活体験，既習事項，確認事項としてしっかりおさえる。

5) 小単元の指導・評価計画

オリエンテーション (1時間)

昔と今の写真などを元に，昔の土地の様子や人々の暮らしについて関心を持つことができるようにする。

1：海中道路の昔と今 (8時間)

第1時：自分の暮らしと海中道路の関係を考え，海中道路について興味・関心を持つことができる。

第2～4時：疑問の整理及び事実確認（調べ学習：よあけの碑について，インタビュー：GT活用等）

第5～8時：前時の調査から分かったことや疑問に思ったことをもとに，海中道路建設に関わった人物や工事の様子に関心を持つとともに，計画を立てて調べることができるようにする。

2：海中道路をつくる (8時間)

第1時：当時の人々がなぜ海中道路をつくろうと考えたのかを島の当時の状況と関連づけてとらえるとともに，工事の進め方を理解することができるようにする。

第2時：工事に参加した人々や作業の様子，工事の規模や難しさを調べ，関連づけて考えるとともに，完成後の人々の暮らしの変化をとらえることができるようにする。

第3時：工事が失敗したときの人々の気持ちを考えるとともに，失敗の経験をいかし，どのような人物との協力や新たな工夫をしたのかをとらえられるようにする。

第4時：現在までの土地の変化を調べ，地域の人々の工夫や努力，その背後にある人々の願いに気づき，これからのまちづくりに関心をもつことができるようにする。

第5～6時：調べて分かったことや考えたことをわかりやすく表現する工夫を考えながら紙芝居にまとめて発表できるようにする。

第7～8：発表会

6) 本時の指導 (2 / 17)

①本時の目標

自分の暮らしと海中道路の関係を考え，海中道路の歴史について興味・関心を持たせる。

②授業仮説

自分の暮らしと海中道路の関係を考える場面で，「もし，海中道路がなければ」ということを考え，話し合うことで，海中道路の歴史について興味・関心を持つことができるであろう。

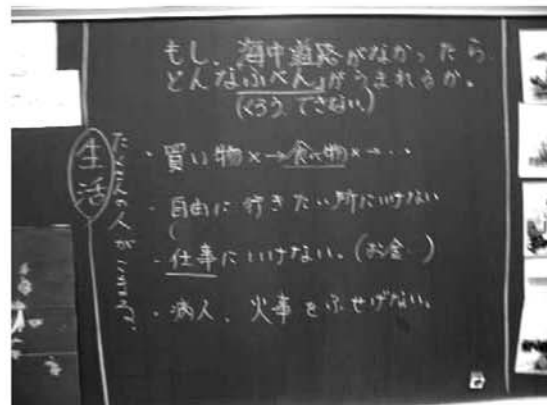
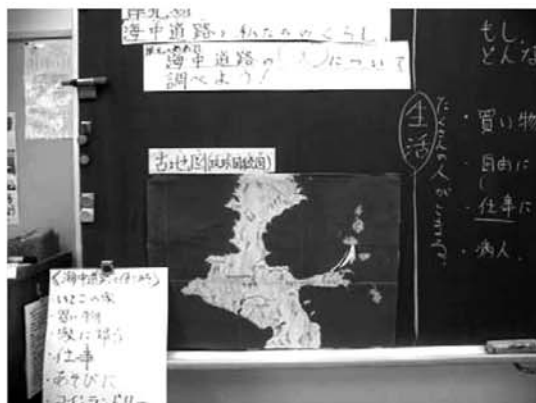
③本時の展開

| | 学習活動 | 留意点・評価の観点 |
|-----|--|---|
| 導入 | 1, 海中道路の今と昔を比べる | ・海中道路がない時の屋慶名・平安座間の古地図（琉球国絵図資料）を提示する。今と昔を比較し、関心を持たせる。中学校社会科との連携（地図の見方・資料比較など） |
| 展開 | 2, 単元のめあての確認 | |
| | 【単元のめあて】:「海中道路の〇〇について調べよう」 | |
| | 3, 海中道路と自分の生活との関係について考える ①海中道路と自分の生活の関係を考える ②話し合いの話題の確認をする | ・今の生活の中で海中道路を使う時はどんな時かを想起させる (以下の話し合いの基盤づくり) (画用紙に書き、後にヒントカードとして使う) |
| | 【今日のめあて】 「海中道路がもしなかったら」、どんな「ふべん」がうまれるかを考えよう | |
| まとめ | ・めあての確認をする | ・「めあて」の分からない言葉を確認する |
| | ○個人で考える | ・①をもとに考えさせる。考える時間を確保する ・ワークシートの活用。自分の考えには話型を提示しておく |
| | ○グループ内で話し合う | ・司会を決め、シナリオに沿って話し合いを進めさせる ・グループでの発表＝発表の場の確保 |
| | ○全体で発表する | ・全体での発表の場の確保 |
| | 4, 海中道路の歴史について話を聞く（蔵根先生の話） | ・海中道路完成までの年表をもとに話を進める。年表には、写真資料を添える。年表は、次時以降興味や疑問を持たせたい部分を隠しておく。 ・海中道路がなかった時代の良い所や離島苦の話を踏まえ「ないほうがよかった、あってよかった」という2つの視点で話す。なくて大変な思い→あったほうがいいのか？誰に頼む？→しかし、県及び村は作ってくれない。あなたならどうする？そこで→当時の人の写真（自分達の手で橋を作っている写真）。 |
| | ④まとめ・発表 | ・授業のまとめとして感想を書く。その際、児童の実態を踏まえ、本時の学習内容をキーワードとしてあげ振り返らせる。特に興味関心を持った学習内容について感想や疑問を書かせる。 ・感想の視点を提示する。→「びっくりした。初めて分かったこと。へえすごい。不思議だ。おもしろい。そうなんだ」 |
| | 評価【関・意・態】 海中道路の歴史について、疑問を持つことができる | ・次時の予告（疑問を整理し、学習計画をたてよう） ⇒本単元の中心内容（教科書の内容）にせまる疑問や課題を持つ段階の入り口に自然に入っていくイメージで、軽く押さえ、次時に細かく個人の課題を設定していくことを伝える |

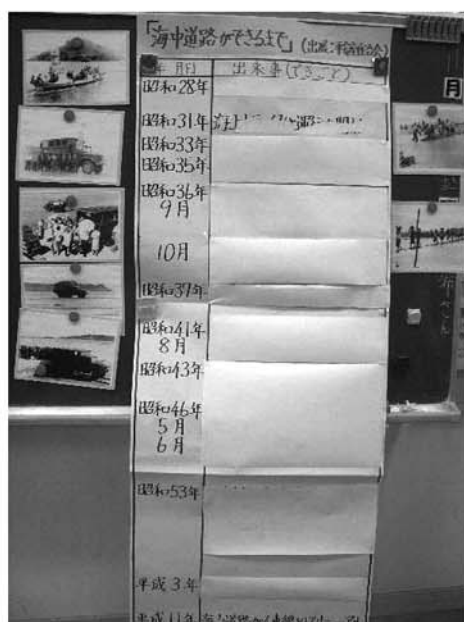
板書計画

| | | |
|--------------|----------------|----|
| 11月9日（金） | 海中道路がもしなかったら | 年表 |
| 海中道路と私たちの暮らし | どんなふべんがうまれるだろう | |
| 単元めあて | 自分の考え | |
| 海中道路の〇〇について | ・・・ができなくてこまります | |
| 調べてみよう！ | なぜなら、 | |
| 古地図（琉球国絵図資料） | 友達を考え | |

実際の板書



写真① 海中道路のなかった時代（古地図） 写真② もし、海中道路がなかったら



写真③ 海中道路ができるまでの年表

7) 指導の実際

〈第1次：2時間〉「学習課題を持ち、学習の計画を立てる」

自分が調べたい課題を明確に持たせ、学習の見通しを持たせる場面であり、単元全体の学習を進めるうえで学習意欲を十分に持たせる過程である。

まず、海中道路のない時代の地域の写真から当時の暮らしの様子を読み取った。次に「日常生活の中で海中道路をどのように利用しているか」を考えさせ、学習内容と自分の生活とを関連付けた。そして単元を通しての課題として「海中道路は本当に必要か」という学習課題を持たせた。

次に、海中道路のない時代の古地図を用い、現在との違いを比較させた（写真①）。そして『海中道路がもしなかったら、どんな「ふべん」がうまれるかを考えよう』という話題で話し合いを行った。話し合いでは、個人⇒グループ⇒全体で話し合い、話し合った内容の共有化を図った（写真②）。その後、海中道路ができるまでの年表（写真③）をもとに GT として地元出身の中学校教諭に海中道路の歴史について話をしてもらった。その際、年表は、次時以降、興味や疑問を持たせたい部分を隠し、話を進めた。その後、海中道路の歴史について疑問に思うことを学習課題として児童一人一人に設定させた（写真④）。



写真④ 学習課題を話し合う

〈第2次：1時間〉「学習課題をもとに海中道路の歴史について調べる」

ここでは、地域史をもとに調べ学習を行った。また地域の自治会長経験者で本学級児童の祖父を GT として招き、海中道路ができる前の苦労や建設に向けての努力、出来た後の生活の変化と海中道路への思いについて話をしてもらった（写真⑤⑥）。元自治会長は、「海中道路が出来る前、島には診療所はあったが、大きな病気や急患、妊婦さんの問題があって大変だった。船で本島まで連れて行かなければならなかったからだ。私は高校生だったので、週末に島に帰った。その時は、渡し船を使ったり遠浅の時には歩いて帰ったりした。海中道路が出来て、毎日、通うことが出来るようになったのは本当に嬉しかった」と述べた。また、「海中道路の建設は、台風により破壊され、また建設される

という自然との闘い」でもあったのである。



写真⑤



写真⑥

〈第3次：3時間〉「調べ学習の結果を資料で確かめる」

第2次で課題解決が出来なかった部分及び学習内容として補足したい部分を、資料を使い確かめた（写真⑦）。



写真⑦ 資料で確かめる

上段 左から右へ

- ・平安座自治会『ひやむぎ かなもり 写真に見る平安座今昔』1984年6月。
- ・うるま市教育委員会『うるま市立資料館年報・紀要』2010年3月。
- ・平安座自治会 海中道路接続 40周年記念事業実行委員会編『海中道路接続 40周年記念事業 平安座海中道路まつり事業報告書』2011年10月。

下段 左から右へ

- ・平安座石油産業用地等地主会編『創立20周年 記念誌』1993年3月。
- ・島袋善吉・吉浜節子編著『孵（す）で変わろう！与勝のあゆみと古代文学』1998年11月。
- ・平安座郷友連合会編『平安座郷友連合会 創立25年記念誌』2008年1月。

〈第4次：3時間〉「学習したことをまとめ、発信する」

学習後、再度「海中道路は自分達の生活に必要なか」を考え、発表資料を作成し、発表会を行った。児童は、台風で流された橋を造り直した先人の努力について、「ゆめをあきらめないで作りなおしたことがすごい（写真⑧）」「台風で海中道路がこわれたのに、そ

の一年後に、こうじをさいかいしたところがすごい（写真⑨）」と評価している。



写真⑧



写真⑨

まとめのワークシート（児童の感想）

海中道路がなかった当時は、離島の人々の生活は困難であった。島民の生活が脅かされることもあり、島の総力を挙げて海中道路の建設に邁進した姿があった。こうした海中道路の学習を通して、児童は次のような学びの軌跡を残している。

Y 児 昔の人々は、未来の私達のために一生懸命に海中道路を造ってくれた。これはすごいことだと思う。皆で力を合わせれば何でも出来るということを学びました。

G 児 海中道路の大切さを感じた。今、生きている私達は、未来の人々のためにも海中道路を大切にしていきたい。台風で建設中の海中道路が流されてもあきらめなかった昔の人はすごいと思う。今の自分たちならすぐにあきらめていただろう。

H 児 昔の人は海中道路がなくて本当に不便だったと思う。でも今は本当に海中道路のおかげで便利な生活を送れる。昔の人の夢をあきらめない心がすごい。

3. まとめにかえてー成果と課題ー

上運天教諭は、日常生活で使用している地域素材の海中道路を教材化し、実践を試みた。学習指導要領でいう、「先人」を地域の方々に見出し、その地域の力で離島苦を克服していく方法として海中道路建設に動いた点を教材の中心に据えたのであった。この実践から、「先人」は、地域の方々であり、地域の努力により、利便性の高い海中道路の実現が叶い、私達の生活が営まれていることに児童は気づき、理解したのである。「未来の私達のために一生懸命に海中道路を造ってくれた（Y児）」「今、生きている私達は、未来の人々のためにも海中道路を大切にしていきたい（G児）」「今は本当に海中道路のおかげで便利な生活を送れる（H児）」という児童の学びは、まさしく地域の方々の努力の上に今の自分達の生

活が営まれていることを実感したことにある。また、上運天教諭は、海中道路という生活素材を取り上げたこと、その素材をテーマにした話し合い活動と学習課題（もしも、海中道路がなかったら）を設定したことが、児童の追求意欲を高め、学習意欲の継続が図られたものと振り返っている。

一方、授業の実際場面では、資料の精選不足から児童の追求の時間を十分保障できなかったがために、児童の考えや意図を授業の中に十分反映させることが出来なかった点を授業の課題として挙げている。

<参考文献>

1. 寺本潔編著『言語力が育つ社会科の授業—対話から討論まで—』教育出版, 2009 年。
2. 有田和正著『有田和正の授業力アップ入門—授業がうまくなる十二章—』明治図書, 2005 年。

A Case Study of the Social Studies in the Fourth Grade in an Elementary School

Hideaki Kano, Futoshi Kamiunten

Abstract

This practical lesson took place in a fourth-grade social studies class, which focused on the achievements of the forefathers who devoted themselves to the development of the local community. In Uruma City, Okinawa, is the Kaichu Doro ('road through the sea') which connects Katsuren Peninsula and Henza Island. The construction of this roadway was complete after the hardships endured by the local people; the forefathers. The children learned through this lesson that by the construction of this road, the difficulties of life on the remote island were greatly improved.

Keywords: Kaichu Doro, Uruma City, Katsuren Peninsula, Henza Island,
fourth-grade social studies